

今年の夏の收穫

土屋 博

十九年前佛蘭西より歸國し配屬せられたる職場、偶々神保町の近邊に所在したれば、小生、晝休みに古書店街を散策すること習ひ性となり、古書蒐集、我が生涯の道樂と相なれり。最近は電腦による古書の通信販賣大いに普及し、以前と比し蒐集遙かに容易くなりぬれど、古書の現物をば手に取るの感觸、矢張り格別の捨て難き味はひあり。

夏の風物詩の一つに百貨店の催す大古本市あり。數多の古書店一堂に會するは正に壓巻にて、古書を求むる客の眞劍なる眼差しと相俟つて、暑さ忘るる無上のひと時と言はざるべからず。今夏も時間を工面し、幸ひにも大古本市に二度ほど出掛くることを得たり。

新宿京王百貨店の大古本市（七月下旬）にては、以下の三冊を購入せり。

一、大町桂月評釋「日本樂府」（至誠堂、大正元年第六版）

天金、函入り、極めて美しき状態の古書なり。頼山陽の「日本樂府」は、日本歴史の名場面六十六を漢詩にしたるものにて、「蒙古來」、「本能寺」など、詩吟にても吟詠せらるる名作揃ひなり。桂月曰く、「弘安の役は、我有史以來の一大快事也。而して能く之を歌ひ得て日本人をして快哉を叫ばしむるものは、獨り山陽の蒙古來あるのみ」と。桂月の解説、格調高く、既に藏書となりたる桂月評釋「日本外史」（至誠堂、大正五年第四十四版）と共に終生の愛讀書となると必定なり。

二、萩野由之著「日本歴史」（上下）（博文館、明治三十年訂正拾七版）

これも保存状態の甚だ良き古書なり。著者の萩野氏は東京高等師範學校教授なれば、或は講義の教科書乃至副讀本なりしか。發行は、日清戰爭直後、日露戰爭前の時期なり。本文は「國史ハ天之御中主神ニ始マル」により始まる。今代史の最終章は「臺灣版圖ニ入ル」にて終はる。

三、平尾花笠著「愛國百人一首手習帖」（泰東書道院、昭和十八年）

戦時中の發行故、状態悪しと雖も、和綴じのペン習字手本は貴重なるものなり。柿本人麻呂「皇は」より橘曙覽「春にあけて」までの百首。文語の苑メルマガに好評連載中の市川浩先生による「愛國百人一首」をば十倍楽しむ爲に購入したり。

東急東横店の大古本市（八月中旬）にては、以下の六冊を購入せり。

一、鷗外全集第三十五卷「日記」（岩波書店、昭和五十年）

文豪の日記は、文語を學ぶ上にて教科書と成り得るものなれば、豫てより眼を皿の如くにして全集の端本を探し居りければ、遂に發見したる喜び、一入なり。「獨逸日記」より、明治十七年十月十三日（鷗外伯林に著きての翌々日）の記述、「大山陸軍卿に見えぬ。脊高く面黒くして、痘痕ある人なり。聲はいと優く、殆女子の如くなりき」と。

二、日本思想體系「頼山陽」（岩波書店、昭和五十二年）

収録されたる「日本政記」は、神武天皇より後陽成天皇まで百七代の天皇の編年體による通史にて、頼山陽晩年の渾身の力作なり。「日本政記」は伊藤博文・井上馨若き日の愛讀書なりき。

三、大町桂月著「増訂 筆のしづく」（郁文舎、大正十一年）

名文家と言はるる桂月の代表的なる隨筆集なり。たとへば「樗牛の一生」は、大學時代よりの親友高山樗牛への弔ひ文。學生時代に樗牛酔ひて戯れに桂月に謂ひて曰く、「君は體が弱さうなり。必ず早く死せむ。君死なばわれ弔文を作らむ」と。

四、安藤英男著「考證頼山陽」（名著刊行會、昭和五十七年）

たざわ書店より刊行されたる同著者の「頼山陽」（昭和五十四年）とほぼ同一に近き内容にて、やや落膽したるも、之れも亦古書蒐集の樂しみの一つかと思ひ直しけり。

五、湯澤天真著「國民朗詠讀本」（麴町酒井書店、昭和十八年）

日本人の有名漢詩作品を一冊の文庫本に纏めたるものなり。題字は内閣總理大臣東條英機によれり。戦時下に於て國民の士氣を鼓舞したらむ。

六、森まゆみ著「かしこ 一葉 『通俗書簡文』を讀む」（筑摩書房、平成八年）

樋口一葉の書簡文は超一流との評價之有り、文語の勉強には恰好の教材とこそ言ふべけれ。既に文庫本は所有せしが、人に貸して戻らざれば、元の本も購入したる次第なり。たとへば、暑中見舞いの文より、「今日は寒暖計九十度を越し申候いかが御しのぎいらせられ候や」。

以上